

冬櫻とほきうしほの音とどく

藤田湘子

「櫻」の正字が美しい。湘子は句集の漢字に正字体を使用していた。漢字をこよなく愛し、白川静の漢字学を愛読していた。日本語の乱れを嘆き、「中国の漢字もさびし雁の空」『てんてん』などと最晩年まで嘆いている。小田原の波音を聞きながら育った湘子には「ふるさとの海は鳴る海蓬餅」『去来の花』という句があり、海辺で育った私の愛誦句である。

掲句は、昭和六十一年、湘子「一日十句」修行の三年目終盤の頃の作。私は、先生に会いたくて高知から度々上京していた。遠来の土産にと、先生から頂いたこの句が書かれた絵馬が今も我家に飾られている。少し色あせた墨色が、ふるさとの海鳴りを思い出させてくれる。

1986年（s61.01.18作） 第八句集『春祭』 鑑賞・野本京